

## 辻吉彦教授の死を悼む

川 越 憲 治

辻氏に私が初めてお眼にかかったのは、今から三十年ほど前、内幸町にあった薄暗いビルの一室であった。氏は書類の山積した机の前に居ずまいを正して座っておられた。どんな要件であったかは忘れたが、私が何かを聞くと、簡潔明瞭、理論整然たる答が返ってきて、付け込むすきがなかった。むずかしそうな顔をして筋が通ったことばかりを云うので、この人は古武士然とした人だなと思った。

その後、交誼を深めるにつれて、氏のユーモラスで自由な雰囲気になつてくると、氏は駄洒落を連発した。酒が好きで、飲みはじめるとことんまで飲むようであった。しかし、冗談の背後には深い意味があるようでもあり、痛飲しながらも、無邪気さと正義感が同居しているようなところがあった。

やがて私は、氏のイメージに中野重治の「豪傑」という詩をダブらせるようになった。それは二十三行からなる短

い詩で、こういう文章からはじまる。

むかし豪傑というものがいた

彼は書物を読み

嘘をつかず

みなりを気にせず

わざを磨くために飯を食わなかった

辻氏は、よく書物を読み、嘘はつかず、みなりは気にしなかった。書物を購入し、研究活動を行い、同僚と議論をするためなら、飯を食わないことなどまったく意に介さなかったと思われる。

後指をさされると腹を切った

恥しい心が生じると腹を切った

かいしゃくは友達にして貰った

氏は、自己に、というより自己の精神に厳しかった。自己流の倫理感だけは絶対にまげなかった。万一にも恥ずかしい心が生じることが、もっとも恥じた人であった。だから友情にも厚かった。おそらく、野上正人氏か、吉野秀雄

氏が、長谷川古氏に、かいしゃくをしてもらえば、もって瞑すべしとの心境であったのではなからうか。

彼は金をためる代りに溜めなかった

つらいという代りに敵を殺した

恩を感じると腹のなかにたたんで置いて

あとでその人のために敵を殺した

氏ぐらい金銭に淡泊であった人はいない。飲み屋の払いは気にかけていたかもしれないが、自分の利益のために金を受けとることは絶対になかった。恩義を感じても、決して平身低頭するような真似はしなかった。ところが、腹の中にはちゃんとしてあって、こちらが忘れてるのに深く氣にかけていたりするのであった。

いくらでも殺した

それからおのれも死んだ

生きのびたものはみな白髪になった

白髪はまっ白であった

しわが深く眉毛がながく

そして聲がまだ遠くまで聞こえた

氏は、何を殺したのであろうか。社会の不正義、横暴なGHQ、下請企業をふみにじる親企業、返す刀で自分自身の何ものかを切っていたのかもしれない。氏は、白髪にはならなかったが、その精神はまっ白であった。なくなった今も氏の声がまだ遠くから聴えてくるような気がする。

彼は心を鍛えるために自分の心臓をふいごにした

そして種族の重いひき臼をしずかにまわした

重いひき臼をしずかにまわし

そしてやがて死んだ

氏にとって、重いひき臼とはなんであっただろうか。日本人のことであっただのかもしれないし、学生や学校のことであっただのかもしれない。あるいは、独占禁止法のことであっただのかもしれないし、公正取引委員会や、そこに勤務していた同僚たちのことであっただのかもしれない。何ものかが、辻氏の心にも重くのしかかっていたようであった。

氏と私は、経済に対する考え方も、独占禁止法に関する解釈も、とことん議論すると微妙に食い違っていた。理論面では一致するところが少なかったが、私は、氏の人格の高潔さには常に敬意を払っていた。「豪傑」の詩の最後は、次のように終わるのであるが、私は、この言葉ほど氏にふさわしいものはないとおもっている。

そして人は 死んだ豪傑を 天の星から見分けることが出来なかった